

『收容所から来た遺書』

2014年09月11日

「港南台9条の会」の例会で、香月泰男のことが話題になった。香月はシベリアに抑留され、その体験から『シベリア画集』を出し、「シベリア・シリーズ」展を開き、脚光を浴びた画家である。立花隆氏が『シベリア鎮魂歌 — 香月泰男の世界』を上梓している。挿入された画は抑留生活の過酷さを描き出している。しかし、何と力強い画であるか。

息子の妻が我が家に来た時、シベリア抑留のことが話題になった。数日後、彼女が、辺見じゅんの『收容所から来た遺書』を届けてくれた。1992年に出版された本で、大宅賞と講談社ノンフェイクション賞のダブル受賞をしている。

シベリアに57万5千人が抑留され、5万3千人が亡くなったと言われている。体験された方から、度々話を聞く機会はあった。『收容所から来た遺書』は抑留生活の実態を克明に記し、主人公・山本幡男の心の強さ、広さ、深さに圧倒され、一気に読んだ。

山本はウラル山中の收容所（ラーゲリ）に送られる。貧しい少量の食事で、過酷な労働が科せられ、ノルマに達しないと深夜まで働かせられ、食料が減じられる。冬はマイナス40度以下にも下がる。栄養失調と寒さで体力を失い、また事故で死んでいく。死者は土に埋められ「白樺の肥やしになる」と言われた。

山本は重労働と空腹と極寒の日々の中で句会を開いて指導し、苦悩を紛らわし耐える力を与えていく。また、彼の「帰国（ダモイ）」という希望の言葉が生き抜く力を与えていく。抑留者は順次、帰国していくが、ソ連がお気に入りの者を優先し、彼は最後まで取り残され、抑留生活は11年に及ぶ。抑留者同士の友情と争いがあり、收容所の管理者との諍いは度々である。更に、国際政治の動向によって、彼らの心は翻弄させられる。

山本は癌に冒され、帰国が絶望的になった時、仲間から「遺書」を書くように勧められる。勧めを受け、ノート15頁に「本文」「お母さま！」「妻よ！」「子供等へ」の4通の「遺書」を死の床で認める。しかし、文書は持ち帰ることが許されず、没収される。仲間たちは、遺書を分担して暗記し、山本の妻に届けようとする。最後の帰国船で帰った仲間たちは、次々と暗記した遺書を奥様に届ける。33年目に届いた遺書もある。山本は仲間たちから強く愛され、深く信頼されていた。そして、彼らは言葉の持つ力がいかに強く、深いものであるかを信じていた。それが「遺書」を届けさせたのである。

奥様への遺書は「君を幸福にしてやるために生まれ代わったような立派な夫になるために、帰国の日をどれだけ私は待ち焦がれてきたことか！ 一目でいい、君に会って胸一杯の感謝の言葉をかけたかった！ 万葉の烈女にもまさる君の奮闘を讃へたかった！ ああ、しかし、到頭君と死に別れてゆくべき日が来た」と書いている。「子供等へ」の遺書は下記のように書いている。「君達はどんなに辛い日があろうとも、人類の文化創造に参加し、人類の幸福を増進するといふ進歩的な思想を忘れてはならぬ。偏頗で矯激な思想に迷ってはならぬ。どこまでも真面目な、人道に基づく自由、博愛、幸福、正義の道を進んで呉れ。

（中略）自分の才能に自惚れてはいけない。学と真理の道においては、徹頭徹尾敬虔でなくてはならない。立身出世など、どうでもいい。」目の覚めるような言葉である。

一辺倒な価値を押し付けた戦時下で教育され、生き残りたいために非人間化させられた收容所の中で、奥様への深い愛と感謝を語り、子どもたちに明日の世界を作る希望を諭す精神の高さに衝撃を受けた。このような人々を戦争で失った日本の損失は計り知れない。